

理科年表の周期彗星の表は周期の短いものから周期の順にならべてある。以前の族と A, B の分類を採用していたときもその分類の中で、周期順にならべた。

彗星の周期は大惑星の摂動によってかなり大幅に変化する。そのために表の順番が入れ替って、かなりめんどうである。しかし、周期順の表は、他には皆無なので、利用者側にとってはなにかと便利である。それで出版社としては不利であるが毎年この彗星のページは新組みとなっている。

表の項目については何度かの変更があったが、1976年版から大改革を行った。数値の桁数を省略して項目を大幅に増やした。

彗星名は一般に用いられているものに従った。同じ発見者で2つ以上の彗星がある場合の区別として、ローマ数字をつづけている。近年、電子計算機のラインプリンター出力をそのまま作表するようになると、ローマ数字では不便でアラビア数字が代用されることが多い。

理科年表の彗星名では、アラビア数字は、発見順を意味し、ローマ数字は同じ発見者による周期彗星を順番に示している。紫金山 I, II は英語では Tsuchinshan I, II と書く。

T は近日点通過の日時を暦表時 ET で示したもので、* 印のついている DeVico 彗星だけは 1846 年である。この項は日の小数以下 2 桁目以下を切り捨ててある。他の項の記載数字の最小桁は四捨五入してあるので注意してほしい。近日点通過の日付けを四捨五入すると、たまたま年末に該当していると年が変わる可能性がある。彗星の永久名称として近日点通過の年号の後にローマ数字をつづける方式が使われているので、四捨五入で年が変わってしまっただけである。

$q, e, Q, \omega, \Omega, i, \lambda, \beta$ は近日点距離、(単位: 天文単位), 離心率, 遠日点距離 (単位: 天文単位), 近日点引数, 昇交点黄経, 軌道傾斜角, 近日点の黄経, 黄緯 (分点は 1950.0) である。

最初出現, 最近出現, 出現回数は字句の通りであるが、出現の年は近日点通過の年を記してある。したがって、毎年観測できるエンケ, シュワスマン・ワハマン I, などについては実際とはかなり違うことになる。

最近出現はその彗星が原稿作製の時までには検出されていれば、その彗星の近日点通過が翌年であれば、その年号を記載する。したがって、今回の T はその彗星が既に出現済みなのだから、“翌年+周期”が記されることになる。また、近日点通過の年がすぎてしまえば、その翌年に入ってからの検出の可能性があっても今回の T はその次を記入するようにしている。

1976 年版を例にとれば 37 番ガン彗星は既に前年から観測されているので、最近出現は 1976 であり、今回の

T は 1982 年となる。また、79 番ウェストパウル彗星は、1975 年 12 月末に近日点通過だったが、1976 年版ではすでに過去のこととなるから、今回の T は 2037 年と記されている。尚、周期の長い彗星では今回の T が 21 世紀になるものがある。それらは十印で区別してある。

これらの資料は主として B.G. マースデンが編集した彗星カタログの第 2 版 (1975 年刊行) により、そのごの新らしいデータで改良した。

彗星の物理的諸量のうち、彗星の数は上記のマースデンの表からとった。核とコマの大きさ、尾の長さは代表的なものを、リヒターの著書 (1954 年刊行) を補足して記した。

主なスペクトル線は東京天文台の斉藤馨児氏が広く文献を調査蒐集されたものによっている。

次は主な流星群の表である。実視観測からきめた輻射点の表はデニングのものがある。近年、ハーバード天文台が主となって各流星群の写真による研究が精力的に行なわれて出現期間、輻射点の移動と拡がり、速度などについてのデータが集まるようになり、平均的な軌道の精度も向上している。

理科年表では以前はかなり小規模の群の表を掲載していたこともある。先年の改革の時に軌道についての情報も入れるようにしたため、全体の数は少なくした。しかし、主な群は落さないように気をつけてある。

出現期間は昇交点の移動のために古い観測のままでは実状に合わなくなっているものがあるので、改訂している。特に 11 月のアンドロメダ群などは問題が多い。

12 月 5 日のほうおう座群は昭和基地に向う宗谷船上也も観測されたもので、1 回だけ出現が観測されているブランベン彗星と関連があるらしい。

輻射点の赤経は慣例により角度で示している。

流星雨として記録された年の表は以前の理科年表に数回掲載したことがあったが、気象学者から再度の掲載を求められて応じたものである。主としてオリビヤーの著書 (1925 年刊行) によっている。

主な流星のスペクトル線については、東京天文台で長沢工氏が調査蒐集したものによっている。

掲 示 板

第 17 回 流星会議の案内

日 時: 1976 年 8 月 7 日 13 時 ~ 8 日 正午。
場 所: 長野県松本市 長野県立松本青年の家
連絡先: 〒394 長野県岡谷市今井区ヨキトギ
信濃天文台内 永井 績
Tel. 02662-2-2356